

【にんげん部門・佳作賞】

心に咲く声を大切に。

創価高等学校 2年 綱島 洋子

きらきら輝く純粋な眼。無邪気に遊ぶ姿。その姿は眩しくて、夏の日差しは教室の奥まで届いていたけれど、私の心の中には届いてくれなかった。私はただ外側からその世界を眺めていたのだ。

そんな時、「せんせい！はじめまして！」

お花のように可愛い声と小さな手。私はその手にひかれ気がつけばカラフルでちょっと不思議なみんなの「夢の世界」に入り込んでいた。そして私の短い先生体験がスタートした。

四角の積み木が「ぱぱ」で、三角の積み木が「ねえね」ひとつひとつのカタチに命が宿っていてその子が笑ったときの瞳はまるで向日葵のように明るかった。

「なんでせんせいはここにきたの？」

突然の問いかけに戸惑いながらも「みんなに会いたかったからだよ。」と答えるとその子の顔がぱあっと咲いた。うれしいという気持ちが、何の躊躇いもなく表情に現れていた。

思えば、「すき」「ありがとう」「なんで」小さな子どもたちは、すべての言葉を自分の気持ちのまま素直に発していた。泣きたい時は泣いて、甘えたい時は甘える。どんなに拙くても全力で言葉にして思いを伝えようとする。あの子たちは誰の目も気にせず、まっすぐに自分と向き合い生きている。

今の私はどうだろう。自分の心に正直に生きられているだろうか。本音より波風立てない言葉を選んでいて。そのほうが「ちゃんとしてる」気がして。でもそれって本当の自分をおいていくことだって気がついた。誰かの期待に合わせるばかりで、いつのまにか咲かないまま枯れていく毎日だったのかもしれない。

今なら少しだけ分かる。誰かの期待をなぞるより自分の気持ちにまっすぐ生きるほうが、よっぽど自分の人生に色が咲いていく。言葉を選ばずに話せた日も、泣いた日も、笑った日も、すべてがわたしの花になる。これから咲くのはちゃんと、「わたしの花」なんだ。